

7月のコラム ～イタリアの素晴らしい避難所～

能登半島地震の発生から半年が経ちました。報道番組で、今の様子を見たのですが、道は片付いているものの、その両側には倒れたままの家屋がずらっと並んでいます。震災直後の風景とそう変わらないように見えます。公費解体が完了したのは、石川県全体でも申請に対してわずか4%だとか。半年も経つと記憶からも薄れていきますが、災害関連死も増えていて生活再建、復興にはほど遠い様子です。

1月のコラムで、国の災害支援が遅過ぎることについて書きましたが、災害対策先進国と言われるイタリアの取組みが紹介されていた番組をみて、驚きました。ここならばらくいてもいいとさえ思いました。そして、日本の災害対策がとても貧弱であることを知りました。

広場には歩いて入れるほど屋根が高い大型テントが並んでいて、被災した家族ごとに一つずつテントが割り当てられます。カーペットが敷かれて、人数分のベッドや冷暖房装置も設置されていました。移動コンテナのトイレは、シャワーつきです。何十日もお風呂に入っていないと訴えていた能登となんという違い。食事は、巨大なコンテナ内に設備の整った厨房が設置され、プロの調理師が料理します。ボランティアが、温かい料理を巨大テントの食堂のテーブルに座っている被災者の前に運びます。日本のように被災者が並ばなくていいんです。冷たいお弁当や同じような菓子パンを毎日食べなくていいんです。

温かくて美味しいものを食べると元気がでますよね。日本の避難所は、「我慢する場」ですが、欧米では「生活再建へ向けて力を蓄えられる場」という共通認識があるそうです。根本的に異なりますね。

約100年前の関東大震災から変わっていない体育館で雑魚寝する避難所。やろうと思えばできることを日本はしていないだけだとあらためて思いました。でも、決して国として裕福とはいえないイタリアでこんな風に制度が進んでいるのはなぜ？それは、待遇が悪いと文句をいうから？！だとか。日本人は、国からしてもらうことに慣れていなくて福祉に対してどこか遠慮がちです。いつの間にか自助努力に慣れてしまっています。でも、災害に合ったときくらいは、安全で健康で文化的な生活を営む権利をしっかりと要求すべきではないでしょうか。

今の日本の避難所は、海外から見ると人権侵害、被災した当の地方自治体の職員が犠牲になって動くのはハラスメントだそうです。

2024年7月 水田かほる

